

## 第五回 作業小屋からずっと(一)

土地を購入したのが十一月の末だったので、冬の間は野遊びをおあずけにして、春になったらどう楽しもうか妄想に浸ることにした。

今までのように友人に甘えてゲストハウスを都度貸していただくのは気がひけるので、ちよつとした作業小屋を建てようということになった。幸いにしてここは市街化調整区域の指定がされるまえに住宅用に建物が建てられていたので、住宅が建てられる土地なのだ。

まず、作業小屋は土間がいいねということになった。

当然、手を洗ったりする水は必要だし、

お茶を入れる程度のお湯は沸かせた方がよい。

トイレもいちいち隣に借りに行くのも悪いし

六十メートル離れているのも不安なので必要だよね。

毎回、日帰りも慌ただしいので

泊まれるように簡単なベッドも会った方がよいね。

外作業をして汗をかいたまま寝るのはどうかな

シャワーぐらい浴びられるようにしたいな。

泊まった時の食事はどうする?。

こうなってしまうたら考えは後戻りできなくなり、急なメールがきたり、資料をつくらなければならなくなった時のために、小さくても良いから仕事スペースが欲しいとか、やれ冷蔵庫はあった方が便利だとか。

自然に囲まれて野遊びを楽しめる小さな作業小屋というイメージはどこかに消えてしまつて、気がつくともちなか暮らしの便利さをそのままコピー&ペーストしたような立派に「家」になつてしまった。それに、いなが暮らしの本に出て来そうな薪ストーブ、それもオーブン付きのが良いなどと、料理をつくりもしない私が言い出す始末。

妻は、しきりに「こんな湿地に家を建てるなんて身体を壊すのじゃないか。」と心配したが、「週末に立ち寄るだけだから」と説得した。

それでも、なんでも一人大工の知り合いに土地をみてもらつたら「まず、中古のユニボを買いなさい。そしてできるだけ多く暗渠排水を入れなさい、それからだね。」とのアドバイス。野遊びをするにしても、それだけ手強い土地だということだ。妻は、私が「ユニボ」のところまで目がキラッと光ったのを見逃さず「そんなもの買って、いったいどこに置いておくの。」と釘をさされた。ただ、頭の中ではユニボなる小型重機を自在にあやつりながら溝を掘り、暗渠排水を埋めて行く自分が見えていたのである。

なんせ、土地は千五百坪あるので、どんなに建物が大きくなっても敷地に収まらないということはないし、建物も自分が良ければいいので徹底的にローコストでいけばなんとかなる。

と、思っていた。

それが大きな間違えであることに気づくのにそう時間はかからなかった。

